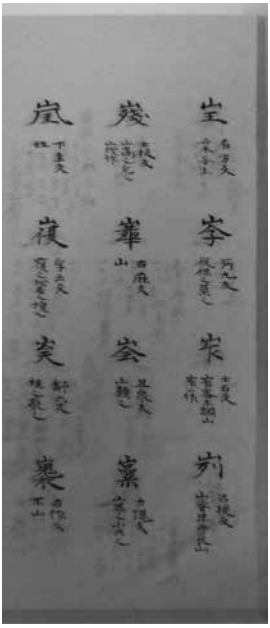
五巻本『字鏡』解題

―大和文華館鈴鹿文庫蔵本による―

中野直樹



〔図1〕（大和文華館蔵『字鏡』巻一冒頭（山部））

〔図2〕（岩崎文庫蔵『字鏡』二冊目冒頭（山部））

一、はじめに

日本の漢字字書史上重要な位置を占める『字鏡』には、東洋文庫内岩崎文庫蔵本（二冊零本。鎌倉中期頃写。以下、「世尊寺本」）と[1]、このほかに同名の『字鏡』（五巻五冊。近世中後期頃写。以下、「五巻本」）が存する。岡田希雄氏は両本の内容を検討し、本文の典拠・構成から「世尊寺本」を真本、「五巻本」を偽本とした。真本の方は影印も公刊されており、字書史のみならず国語史上からも注目され研究に利用されてきたが、今取り挙げる偽本の方については殆ど研究がない。

筆者は、大和文華館鈴鹿文庫蔵『字鏡』（以下「文華館本」）を実見する機会を得、先行研究による報告をもとに、これを「五巻本」の一本と認めた。この本について調査するうち、基本的には「五巻本」について先学が明らかにしたところ（本書の成立時期・本文の典拠）に従うべきものと考

えたが、先行研究が触れていない本文の存在もあり、他にいくつか述べるべき点もあるように思われるので、本稿で「文華館本」を用いて「五巻本」の全容を報告することとしたい。

二、五巻本『字鏡』について

二―一、五巻本『字鏡』についての先行研究概観

ここで、「五巻本」についての先行研究を見ておく。先行研究では「五巻本」に東京大学文学部国語研究室蔵本・天理図書館蔵本・筑波大学附属中央図書館蔵本が存することが指摘されている[2]。「五巻本」については早く、赤堀（1902）が言及した。氏は部首を一覧して示したうえで、本文の巻首が欠けていることから『字鏡』の欠本を寄せ集めた本とし、撰者は未詳とした。また、奥書等が三箇所見られることも指摘している（奥書については、本稿二―二参照）。

岡田（1929）は赤堀氏と同じく、残欠本を合わせたものであろうと述べ、岡田（1933）では「五巻本」について、一部「世尊寺本」を真似て模写し、他を他本でもって書き加えた言語道断無下の本であるとし、おそらく「世尊寺本」の存在を知る者が偽作意識を働かせて作成したのであろうと言う。また、氏は成立を江戸中期から末期頃と推定する。

川瀬（1955）は、本文の前半は「世尊寺本」下巻の本文および注文を写し、後半は慶長十五年版『倭玉篇』（以下、「慶長十五版」）の一部を抄出したものを併せたものとした。また、奥書に見られる「癸酉」は諸本の書写年時からして、宝暦三年（1753）が妥当であろうとする。「世尊寺本」には「世尊寺殿伊房卿字盡」という極札が付されており、「五巻本」の奥書はそれを見た上で記されたと思われるので、極札が付された以降の書写と考えられることも指摘している。

築島（1980）は諸先行研究を承けつつ、「五巻本」の丁に何箇所か錯簡があることと、川瀬氏がいうように巻三以降の本文は「慶長十五版」により、巻五の車・女部だけは「慶長十五版」ではなく『音訓篇立』（黒川本。以下、「音訓篇立」）によることを指摘し、内容は杜撰であり、「世尊寺本」で校合したという奥書の内容も信を置けないとした。

以上いずれの研究も、本書について粗雑な本という評価を下しており、見るべきところは少ないという見解である[3]。

二―二、大和文華館鈴鹿文庫蔵本の書誌

以下、大和文華館鈴鹿文庫[4]所蔵本の装訂・寸法等を示

す[5]。

〔装訂〕袋綴
〔冊数〕五冊
〔寸法〕縦：26・4糎　横：18・5糎
〔料紙〕楮紙
〔外題〕字鏡〔内題〕字鏡
〔本文〕縦六行・横四段・無辺無界
〔注〕反切・直音注・漢文注・仮名音注・和訓注（万葉仮名・片仮名）
〔奥書〕巻二：癸酉歳以　世尊寺中納言殿手書原本校合畢
巻四：右字鏡四冊並附録一冊原縦一尺三寸二分横九寸七分之大本也今度以便宜今縮寫畢
安政二年三月十五日　中臣連胤
巻五：字鏡附録二十又五枚因世尊寺中納言殿手澤原本
校合畢
歳之癸酉
〔他〕表紙は黄色。
巻三の遊紙裏に「因世尊寺中納言殿手澤原本以黒點校合」とある。巻一から巻四までは表紙中央下部に第一・第二・第三・第四とあり、巻五のみ同じ位置に附録とある。
各冊表紙見返しに朱の所蔵印が二つ押されている。「尚聚舎蔵」[6]・「大和文華館圖書之印」。

巻二・巻五の奥書および巻三遊紙裏に見られる記述は他本（東京大学本・天理図書館本・筑波大学本）にも見られるが、巻四の奥書は「文華館本」のみが持つ。巻二・巻五の奥書は、川瀬氏の言うように、「世尊寺本」の極札に見られる「世尊寺殿伊房卿字盡」を見たもので間違いない。

巻四の奥書に見える中臣連胤とは鈴鹿連胤のことである[7]。鈴鹿氏は天治本『新撰字鏡』巻二・巻四を発見した人物で、安政三年に残りの十巻が存することを知り、これらを筆写したことで知られる（赤堀（1902）、大槻・山田（1916）、山田（1943）参照）。「文華館本」巻四の奥書からは、安政二年に鈴鹿氏が五巻本『字鏡』を筆写していたことが分かる。これは、近世における『字鏡』の伝承の面から注目される。

鈴鹿（1920）によれば、鈴鹿連胤は狩谷棭斎、黒川春村、伴信友、平田篤胤、屋代弘賢ら国学者と交友関係があり、特に春村とは安政二年初冬に文通を始め、それ以後質疑応答・蔵書の貸し借りもしていたという。春村といえば「五巻本」を有しており（東京大学蔵本）、この本は春村が連

胤から「文華館本」を借りて写したもの、或いはその逆かと思われ、「五巻本」の流布の一端がうかがえる。

三：本文の構造

以下、「文華館本」を用いて五巻本『字鏡』の本文の構成について見ていく。

三―一：部首

「文華館本」の部首は以下の並びになっている[8]（各部首上部の数字は本文に付された部首番号を示している）。先行研究が「五巻本」に対して抄出した本や残欠本の寄せ集めという評価を下すのは、本文に脱落があることと、どの字書にも見られるような部首（例えば、鳥・木・宀・心部等）を欠いているからである。

巻一

山　21口　22衣　23門　24人　25巻　26奉　27示　28禾　29米

巻二

30食　31文　32口　33冂　34亠　35享　36高　37鬲　38缶　39豕　40夂　41**犬**　42斤　43戈　44弋　45尋　46臼　47子　48由　49犭　50艮　51矢　52巴　53予　54冖　55气　56共　57一　58生　59**⿱亠厶**　60卩　61韋

巻三

101土　102玉　103頁　104兄　105弟　106儿　107臣　108父　109男　110予　111民　112夫　113我　114身　115色　115**匠**　116亢　117鼻　118目　119耳　120見　121苣　122口　123舌　124彡　125牙　126須　127髟　128齒　129手

巻四

130収　131舁　132臼　133爪　134又　135足　136傘　137骨　138血　139肉　140心　141呂　142寢　143鬥　144屮　145曰　145乃　146可　147兮　148号　149于　150皿　151品　152眼　153冊　154云　155音　156告　157言　158欠　159甘　160卒　161夲　162本　163彳　164行　165止　166是　167又

巻五

車　5女　6尢　7久　8舛　9辵　10止　11立　12工　13二　14走　15癶　16此　17人

川瀬・築島両氏が指摘しているが、巻二61韋まで「世尊寺本」下冊の部首配列と同じである（但し、「世尊寺本」

には韋部以降もある）。巻三・巻四は川瀬氏が言うように、部首配列が部分的に「慶長十五版」と同じである（部首自体は全て「慶長十五版」に存する。但し、「慶長十五版」と部首番号は合わない）。

また、巻二に見える46臼部と53予部が巻三以降にも重複しており（巻三110・巻四132）、巻二とそれ以降が別の典拠によっていることが分かる（重複した部首に見られる掲出字および注も異なっている）。部首番号を見ても、巻二とそれ以降では断絶がある（61から101）。しかし、これは中途の脱落であるのか、元の典拠での部首の序数をそのまま写したものなのかは分からない。赤堀氏は、巻一・巻二と巻三・巻四と巻五の内部ではそれぞれ部首番号が連続しているので、元の典拠の番号をそのまま取ったものかとする。

巻五については、川瀬氏は巻三・四と同じく「慶長十五版」によるとするが、冒頭の車部と女部に関しては築島氏がいうように注文も含め「音訓篇立」によったと見るべきである[9]。「音訓篇立」を見ると、車部と女部は連続しており、「五巻本」に見える注文も「音訓篇立」と合う。

また、巻五の部首番号も巻四とは接続せず断絶がある（167から4）。これも巻三・巻四と巻五とが別本であったことを示すものと思われる。巻五の冒頭に見える車・女の二部首についてであるが、川瀬（1955）、北（1969）は東京文理科大学蔵本『字鏡』（「世尊寺本」の近世写本。筑波大学附属中央図書館現蔵）にも巻末にこの二部首だけが見えることを指摘している（筆者が筑波大学蔵本を確認したところ、部首番号は女部が第五とされており、部首番号が「五巻本」と同じになっていた）。このことも、巻三・四と巻五が別本であったことを裏付ける。

三―二：本文配列と本文字数

巻一・巻二

巻一・巻二の本文配列（掲出字の並び）は先行研究での指摘通り、全て「世尊寺本」と全く同じになっている。巻二までの字数を示しておくと、「世尊寺本」は4423字で、「文華館本」の巻二までは3635字となっており、「文華館本」は韋部より後の本文を欠いている分、字数が少なくなっている（韋部までの字数は同じ）。

巻三・巻四

巻三・巻四の典拠については川瀬（1955）が、「慶長十五版」を抄出したものであろうと指摘する。筆者による

追試でも「文華館本」巻三・巻四と、「慶長十五版」とは本文配列・字数に関係が認められた（本文配列については後述。また部首順は両者で異なる）。ここでは、「文華館本」巻三・巻四の部首ごとの本文字数と「慶長十五版」の対応箇所の本文字数を確認しておく[10]。各部首下部の数字は各部首内での本文字数を示している。

「文華館本」：巻三　合計 1515 字

土245・玉165・頁77・兄2・弟8・儿10・臣8・父4・男5・予2・民2・夫4・我2・身15・色2・**匠**2・亢2・鼻21・目255・耳44・見64・苜4・口240・舌4・彡10・牙2・須2・髟39・齒37・手238

「慶長十五版」：対応部首　合計 1526 字（（　）は当該部首が「文華館本」では直上の部首内に編入されていることを示す）

土246・玉165・頁78・兄2・弟8・儿10・臣8・父4・男5・予2・民2・夫4・我2・身15・色2・匠2・亢2・鼻21・目257・耳44・見63（覞1）・苜4・口243・舌4・彡10・牙2・須2・髟41・齒37・手240

「文華館本」：巻四　合計 1325 字

収18・舁4・臼2・爪4・又20・足166・傘2・骨54・血6・肉215・心337・呂2・寢12・鬥6・屮2・曰7・乃3・可4・兮2・号2・于5・皿6・品2・畑8・冊4・云2・音9・告2・言169・欠91・甘11・夲6・**夂**4・本5・彳84・行24・止17・是3・又5

「慶長十五版」：対応部首　合計 1347 字

収18・舁4・臼2・爪4・又20・足177・傘2・骨57・血6・肉214（筋1）・心334（思2・**忽**2）・呂2・寢8（**丮**4）・鬥6・屮2・曰7・乃1（**丐**2）・可4・兮2・号2・于5・**叩**6・品2・**畑**8・冊4・云2・音9・告2・言166（**詰**4）・欠87（次4）・甘9（旨2）・夲6・**夂**4・本5・彳88・行25・止18・是3・又5

右で明らかなように、本文字数に関しては両者ほぼ同じであることが分かる（若干、「慶長十五版」の方が多い（網掛け部））。

次に、巻三・巻四における各部首内での掲出字の配列について見ておきたい。両書の掲出字の配列は一見一致しないように見えるがそうではない（〔図3〕・〔図4〕参照）。「文華館本」の本文配列を、「慶長十五版」の掲出順の数字によっ

て示す。例は、巻三歯部を用いる。

「文華館本」巻三歯部

（40丁オ）

		4	3	2	1
		5	6	7	8
		12	11	10	9
		16	15	14	13

（40丁ウ）

22	21	20	19	18	17	
23	24	25	26	27	28	
	37	35	33	31	29	
		36	34	32	30	

〔図3〕「文華館本」巻三歯部（冒頭部）

〔図4〕「慶長十五版」歯部（冒頭部）

右の如く、「文華館本」は「慶長十五版」の掲出字を牛耕式に横へ並べて写していることが分かる（部分的に例外あり）。何故、このような引用の仕方をしたのか不明であるが、「慶長十五版」を写している箇所は殆どの部首で右のような状況になっている[11]。このことから、掲出字の配置はともかくとして、順序はほぼ同じであるので、当該箇所は「慶長十五版」を典拠としていることは明らかである。

巻五

この巻は「音訓篇立」を基とする車・女部と、「慶長十五版」を基とするそれ以降の部首に分けて見ることとする。巻五の部首を一覧すると次の通り。先と同じく、各部首の下の数字は各部首内での本文字数を示している。

「文華館本」：巻五（「音訓篇立」引用部）　合計288字

車112　女176

「音訓篇立」：対応部首　合計382字

車126　女256

「文華館本」：巻五（「慶長十五版」引用部）　合計523字

尢2　久11　舛2　辵145　止20　立36　上4　二9　走85

癶2　處2　此4　人201

「慶長十五版」：対応部首　合計790字

尢2　久12　舛2　辵154　止20　立38　上4　二9　走85

癶2　處2　此4　人456

車・女部はいずれも「音訓篇立」と本文配列が殆ど同じになっている（一部前後・脱落がある）。本文字数は「文華館本」の車部が112字、女部が176字で、「音訓篇立」の字数がそれぞれ126字と256字である。車部は「文華館本」に落丁があるので、その分を引けば「音訓篇立」も112字になり全く同じ字数になる。女部は写し落としが多く、特に後半は写されていない本文もあり、字数は異なっているが、女部の中盤までは両者の本文にかなりの一致をみる。

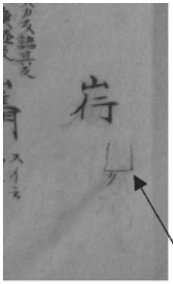
車・女部以外の部首については、川瀬氏の指摘通り「慶長十五版」からの引用である。本文配列・本文字数は人部を除きほぼ同じである[12]。「文華館本」は523字、「慶長十五版」の対応箇所の字数は790字となっている。

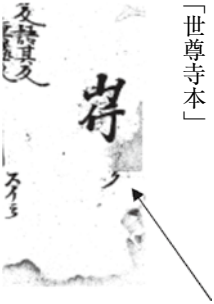
また、巻五のうち、「慶長十五版」が典拠となっている箇所の掲出字の配列は、巻三・四と同様の配列になっていることを築島（1980）が指摘している。

三―三：注文の比較

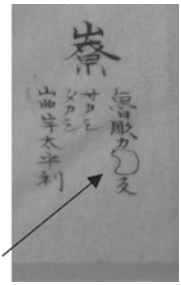
巻一山部まで

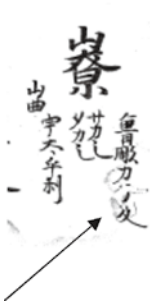
「文華館本」巻一山部までの本文に対する注文は、岡田、川瀬、築島諸氏が説くごとく、誤写数カ所を除いて「世尊寺本」と全て同じになっている（〔図1〕・〔図2〕参照）。また、「文華館本」の虫損、貼紙跡を写した箇所は、現存の「世尊寺本」と同じである（〔図5〕）。「世尊寺本」の虫損個所と「五巻本」の虫損の写しの箇所が一致することについては岡田（1933）が指摘していたが、貼紙跡にも同様のことが言える。



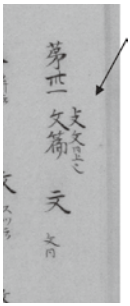


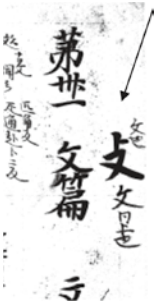
〔図5〕貼紙・虫損比較例





さらに、「世尊寺本」には室町中期から末期頃の筆による書入れが散見されるが（築島（1980））、「文華館本」はそれも写している（〔図6〕）。





〔図6〕「世尊寺本」後筆書入れ対応箇所例

したがって、「五巻本」は「世尊寺本」そのもの、若しくはその忠実な転写本の一部を写したものということになる。「五巻本」の奥書には原本により校合したとあるので（この校合とはどのような作業を指すのかははっきりしないが）、これが全く信用できないということもない。巻一山

部の直後に続く凵部から巻二までの本文に付された注文については、先行研究では言及がない。この箇所の注文については四章で扱う。

巻三・巻四

巻三・巻四の本文の典拠としては、「慶長十五版」が指摘されている（川瀬（1955）・築島（1980））。そこに見られる注文は、「慶長十五版」から取ったと見て間違いない。両者において異なる注は、仮名遣いや濁点の有無の相違がいくつか見られる程度のものである。

巻五

巻五について、川瀬氏は「慶長十五版」との関係を、築島（1980）は「音訓篇立」および、「慶長十五版」との関係を指摘している。注文については全同ではないが、車・女部は「音訓篇立」、その他は「慶長十五版」とほぼ同じであり、両本にかなり近い本が「五巻本」の典拠になっていると見てよい。

以上、「文華館本」の本文掲出字と注文の典拠を一旦まとめると次の通りになる。

	本文掲出字典拠	注文典拠
巻一山部：	世尊寺本『字鏡』	世尊寺本『字鏡』
巻一凵部～巻二：	世尊寺本『字鏡』	不明
巻三～巻四：	慶長十五年版『和玉篇』	慶長十五年版『和玉篇』
巻五車・女部：	黒川本『音訓篇立』	黒川本『音訓篇立』
巻五車・女部以降：	慶長十五年版『和玉篇』	慶長十五年版『和玉篇』

ここで注目しておきたいのは、「五巻本」の典拠として「世尊寺本」「慶長十五版」「音訓篇立」が見えることである。「慶長十五版」・「音訓篇立」は本文・注文ともに「世尊寺本」から発展した『和玉篇』である。

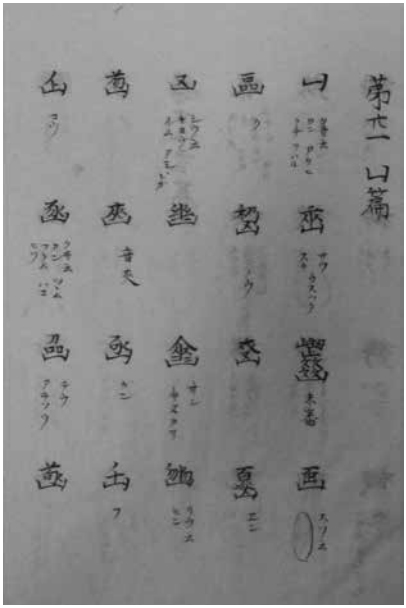
結局、一見雑然とした構成に見える本書は、大部分が同じ字書を源に持つ本が集まっていることになる。但し、この事実が何を意味しているのかについては不明であり、今後検討する必要がある。

四：巻一凵部～巻二の注文の典拠について

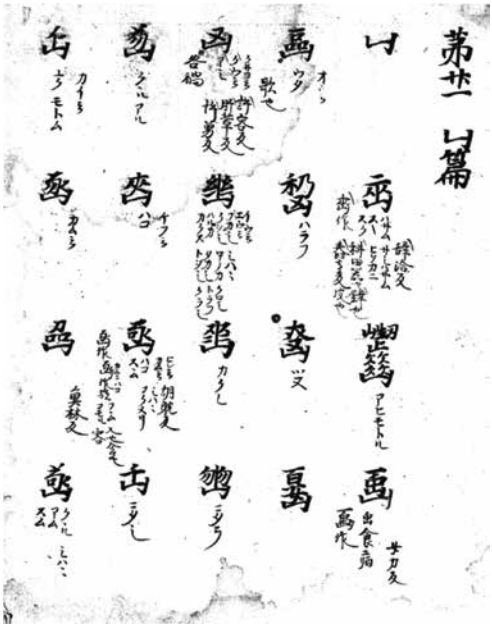
巻一凵部～巻二までの注文（先表不明部分）については先行研究が言及しなかったので、この箇所について述べる。当該箇所の本文掲出字自体は、先述の通り「世尊寺本」か

らそのまま引用されている。参考として当該箇所の本文を〔図7〕・〔図8〕に示す。

注文に注目すると、「世尊寺本」と異なる注文が多いことが分かる。そこで、当該箇所に見られる注文の内、字音・和訓その他について確認し、どのような特徴を持つのかについて見ていきたい。



〔図7〕「五巻本」巻一口部冒頭



〔図8〕「世尊寺本」下冊口部冒頭

四―一：字音

当該箇所には、字音注に反切・直音注・仮名音注が見える。但し、反切・直音注が付されることは極稀で、殆どが仮名音注である。また、字音注は本文の右下に寄せて書かれており、和訓が書かれる位置とは分けられている。

反切は全六例見える。これらはみな享和本『新撰字鏡』（以下、「享和本」）と同じである（天治本『新撰字鏡』は「天

治本」とする）。当該箇所に見られる反切は以下の通り（所在は巻丁表裏行段の順に示す）。

「文華館本」	「享和本」	「天治本」	「世尊寺本」
一6ウ42「**衿**」呂窮反	呂窮反	呂躬反	呂躬反
一7ウ62「**裞**」丈諫反	丈諫反	大諫反	大諫反
一9オ32「**袜**」无發反	无發反	无**蔑**反	云發反
一34ウ11「**襤**」利力反	利力反	利力反	利力反
一35ウ51「**稞**」莫代反	胡買反	莫代反	胡買反	莫伐反	胡瓦反
一41ウ51「**羅**」大石也	大石反	大石反	大石反

右例から、「文華館本」に見える反切は「享和本」に最も近いことが分かる。しかし、これらは『新撰字鏡』の反切を持つ本から直接ではなく間接的に引用された可能性が高いと考えられる。多くの反切を有する『新撰字鏡』から直接引用したとするには、「文華館本」に見られる反切の数がかなり少なく、引用した基準も見いだせないからである。

『新撰字鏡』の反切を有する本として、「世尊寺本」以外に、「音訓篇立」・延徳本『和玉篇』がある。これら二本は「世尊寺本」に関係する本であるが、「文華館本」とは反切が合わなかった。

また、直音注は次の一例のみである。

「文華館本」	「享和本」	「天治本」	「世尊寺本」
一6オ52「**㕘**」音夾	該当注なし	該当注なし	該当注なし

右のように直音注は、いずれの本とも合わず、典拠不明である。仮名音注は漢音と呉音片方の音形を示すこともあるが、その一方で両音形が同一字に注されるなど、特に整理はなされていない。

「文華館本」

一6ウ41「衣」イ　エ
一16オ21「門」ボン
一21ウ31「今」キン　コン
一21ウ11「尓」ジ
二3ウ31「**饛**」モウ

呉音・漢音の他に唐音も一例見られる（二18ウ32「亭」チン）[13]。

四―二：和訓

注文には字音のほかに、和訓が付されている。大部分は片仮名で書かれているが、万葉仮名による和訓が六例存し、注目される。本書の万葉仮名による和訓の全例は以下の通り。

	「文華館本」	「享和本」	「天治本」	「世尊寺本」
一6ウ64	「褫」古己呂毛	古己呂毛	古己召毛	コ、ロモ
一7ウ63	「褓」毛豆支也	毛豆支	毛豆支	ムツキ
一9オ23	「襪」志太久豆	志太久豆	志太久豆	シタウツ
一16ウ24	「闥」弥加止	弥加止	和支乃弥加止	該当和訓なし
一39ウ64	「**𢧵**」阿米也	阿米	阿女	アメ
二51オ33	「**𢧵**」弓如介	弓如介	加介	ユカケ　加介也

右の「文華館本」の万葉仮名は、「享和本」に全ての例を見つけることができる。右のことを踏まえ、本書の万葉仮名の典拠の可能性として二つ挙げられる。一つは、『新撰字鏡』からの直接引用で、もう一つは『新撰字鏡』の和訓を万葉仮名表記のままいくつか残した本からの間接引用である[14]。現状では後者と見るべきと考える。『新撰字鏡』から直接引用したとするには、先の反切と同じく数が少なく、引用基準が見えない。

和訓の大部分は片仮名であり、「世尊寺本」とは殆ど合わない。片仮名和訓は「文華館本」に2997例存するが、このうち、「世尊寺本」と全く同じ和訓は401例に過ぎない（但し、万葉仮名と片仮名の違い、仮名遣いの相違や濁点の有無、誤写等の差を問わないならば、567例が同じになる）。

ここまで、「文華館本」巻一口～巻二までの本文における、字音・和訓の特徴を見てきた。当該箇所の注文は「和玉篇」に似た体裁を有しており、字音・和訓ともに、『新撰字鏡』・「世尊寺本」との関係が疑われる。

四―三：異体字注

異体字注は、数は多くないもののいくつかの本文に付されている（全123例）。「同・古・籀・正・俗・本」などと異体字の別を示すこともある。「享和本」・「天治本」・「世尊寺本」と比較を行ったが、一部合う例が存するものの、全部をその典拠とすることは出来ない。

「文華館本」
一8ウ63「衫」**襪**同
二12ウ21「口」古圍

三42ウ61「撒」俗作擦
四3オ51「弃」棄古文
五4ウ14「姥」媽正作

四―四：漢文注

漢文注も少数見える。次に例を示す（全53例）。

	「文華館本」	「享和本」	「天治本」	「世尊寺本」
一17オ34	【圖】天門也	該当注なし	該当注なし	天門也
一34ウ51	「稗」小官也	小官也	小官也	該当注なし
一34ウ61	「柄」郷名	該当注なし	郷名	郷名
二36オ42	【犾】層見	該当注なし	該当注なし	該当注なし

右例をみれば、「享和本」・「天治本」にのみ合う例、「世尊寺本」にのみ合う例、合わない例と様々であるが、漢文注の典拠としては全面的に「享和本」・「天治本」・「世尊寺本」いずれかに拠ったと見ることは出来ない。ただ、一部の注は『類聚名義抄』・『大広益会玉篇』・『広韻』・『龍龕手鑑』とも合うのであって、なんらかの典拠があったことは確かである[15]。

ほかに、注の中に「クヰ云」「スツ云」「シン云」「シツ云」「リウ云」という注がいくつかの本文に付されているが、この注の意味するところは分からない。

以上、当該箇所の字音と和訓には、『新撰字鏡』（「享和本」、「天治本」）・「世尊寺本」に関連すると思われる注があり、異体字注と漢文注は具体的な典拠は不明であったが、一部には『新撰字鏡』・「世尊寺本」と同じ注文が散見されることが分かった。

筆者はこの巻一凵部から巻二までの注文の典拠について考えがあるが、それはすべて別稿に譲り、今回は本文・注文の構成について報告するにとどめる。すべての本文・注文の典拠が明らかになったとき、本書の成立事情なども併せて考えたい。

五：まとめ

以上、「文華館本」を用いて「五巻本」の本文・注文についてみてきた。本書は本文・注文の典拠が殆ど分かっている以上、本文から言語資料として情報を取り出す際には元の典拠によればそれで良いので、そういった観点からは本書に多くを期待することはできない。しかしながら、近世期の字書発達史、また、近世期の字書使用のあり方、同時期の字書研究の水準に対する考察において、本書は極め

て興味深い情報を提供してくれる資料であることは間違いないと思われる。今後、ますます本書の利用が進むことを望む。

【参考文献】

赤堀又次郎（1902）『国語学書目解題』吉川半七
大槻文彦・山田孝雄（1916）『新撰字鏡』六合館
岡井慎吾（1933）『玉篇の研究』東洋文庫
岡田希雄（1929）「部首分類漢和辞書の沿革概説」『国史と国文』（2）立命館大学出版部
――――（1933）「岩崎文庫所藏古鈔字鏡解説」『字鏡　舊鈔本』貴重図書影本刊行会
川瀬一馬（1955）『古辞書の研究』（川瀬一馬（1986）『増訂古辞書の研究』雄松堂出版による）
北恭昭（1969）「漢和字書の系譜における慶長整版和玉篇―『字鏡』『音訓篇立』『大広益会玉篇』との対比において―」『国語学』（77）国語学会
――――（1977）「倭（和玉篇）」佐藤喜代治編『国語学研究事典』明治書院
國學院大學日本文化研究所編（1994）『神道事典』弘文堂
國史大辭典編集委員改編（1987）『國史大辭典』吉川弘文館
鈴鹿三七（1920）『異本今昔物語抄：附　鈴鹿連胤略傳』鈴鹿三七
西田正宏（2014）「大和文華館の鈴鹿文庫」『上方文化研究センター研究年報』（15）大阪府立大学上方文化研究センター
福田安典（2002）「愛媛大学鈴鹿文庫・鈴鹿連胤関連資料について」『調査研究報告』（28）国文学研究資料館
前田富祺（1967）「延徳本和玉篇について」『本邦辞書史論叢』三省堂
築島裕（1980）「東洋文庫蔵字鏡（世尊寺本）解題」『古辞書音義集成』（6）汲古書院
山田忠雄（1967）「延徳本倭玉篇と音訓篇立・世尊寺本字鏡（編輯者注）」『本邦辞書史論叢』三省堂
山田孝雄（1943）『國語學史』寶文館
吉海直人（1991）「大和文華館蔵　和古書目録」『同志社女子大学学術研究年報』（42）同志社女子大学

【使用文献】

慶長十五年版『和玉篇』（慶長十五年版、内閣文庫蔵本、中田祝夫・北恭昭編（1981）『倭玉篇慶長十五年版研究並びに索引』勉誠社　による）
五巻本『字鏡』（安政二年写、大和文華館蔵本）

世尊寺本『字鏡』（鎌倉中期頃写、東洋文庫内岩崎文庫蔵本、『古辞書音義集成』（6）汲古書院（1980）による）
黒川本『音訓篇立』（室町末期写、東京大学文学部国語研究室黒川文庫蔵本、『古辞書音義集成』（15）・（16）汲古書院（1981）による）
延徳三年本『倭玉篇』（延徳三年写（1491）、東北大学蔵本）
沢存堂本『広韻』（余迺永校注（2008）『新校互註宋本廣韻定稿本』上海人民出版社　による）
沢存堂本『大広益会玉篇』（『宋本玉篇』北京市中国書店（1983）による）
観智院本『類聚名義抄』（天理図書館善本叢書和書之部編集委員会編（1976）『類聚名義抄観智院本　佛』『類聚名義抄観智院本　法』『類聚名義抄観智院本　僧』八木書店　による）
天治本『新撰字鏡』（京都大学文学部国語学国文学研究室編（1973）『天治本新撰字鏡（増訂版）』臨川書店　による）
享和本『新撰字鏡』（京都大学文学部国語学国文学研究室編（1973）『天治本新撰字鏡（増訂版）』臨川書店　による）
続古逸叢書本『龍龕手鑑』（国書刊行会編（1974）『宋本新修龍龕手鑑』国書刊行会

［付記］

原本閲覧・影印取り寄せに際して、大阪大学附属図書館、筑波大学附属中央図書館、天理図書館、東京大学文学部国語研究室、東北大学附属図書館、大和文華館より御高配を賜りました。ここに記して感謝申し上げます。本稿は、平成二十九年度に大阪大学大学院文学研究科に提出した博士論文『「字鏡」諸本の基礎的研究』第三章「本邦撰述の字書との関係」（書き下ろし）を加筆・修正したものです。

注

1　岩崎文庫蔵本には世尊寺殿伊房卿云々という極札が付されているので、世尊寺本という名称が一般的になっている。

2　「文華館本」についてはこれまで報告が無かった。なお、筑波大学附属中央図書館蔵本については、同館HPにて影印を閲覧できる。

3　なお、諸氏の調査本は、赤堀氏については不明で（東京大学蔵本（黒川春村旧蔵本）か）、岡田氏が用いたのは赤堀氏調査本と筑波大学蔵本、川瀬氏は天理図書館蔵本・筑波大学蔵本・東京大学蔵本、築島氏は東京大学蔵本である。

4　鈴鹿文庫の来歴・所蔵品等については、『国史大辞典』、吉海（1991）、福田（2002）、西田（2014）に詳しい。

5　本書については、日本古典籍総合目録データベースにて影印を閲覧できる。同データベースでは「世尊寺本」と「五巻本」が同一書名にまとめられているので注意されたい。

6　鈴鹿連胤の蔵書印。

7　鈴鹿連胤　一七九五～一八七〇年。江戸時代後期から幕末にかけての神道家、国学者。完成七年京都吉田神社の社家に生まれた。鈴鹿家は代々吉田家の家老をつとめる家。（中略）国学を山田以文に、和歌を香川景樹に、漢学を松岡仲了に学び蔵書家としても知られた。（中略）後半生は著述に力を注ぎ、『神社覈録』七十五巻を編纂した他、数多くの書を著した（以下略）。（椙山林継執筆項）『神道事典』

8　巻一山部・巻五車部には部首番号が付されていないのは前半の本文が落ちていることによる。巻四屮部の部首番号は脱落である。巻三115色115**匝**および、巻四145曰145乃は部首番号が重複している。

9　川瀬氏は、巻三・四・五の部首は車部を除いて全て「慶長十五版」の上巻に存する部首であることを指摘しているが、車・女部は「音訓篇立」によるものと考えられるため（築島（1980））、結局本書の「慶長十五版」から取った部首に関して言えば、全て上巻によったことになる。

10　部首配列は「文華館本」と「慶長十五版」とでは異なっているので、「文華館本」の配列に「慶長十五版」を合わせている。

11　この配列は「五巻本」を書写する際に、本文の書写スペースを計算する為であった可能性は考えられる。つまり一丁あたり何列書くかまず横に写して確定させるわけである。また、掲出字が少ない部首は、本文配列が両者ほぼ同じになっていることもある。この本文配列は「五巻本」編者の改編であるか、それとも典拠の本文配列が元からこのようなものであったのかは今のところ分からない。

12　人部は「文華館本」側に脱落があり、本文配列も整わない。

13　唐音の仮名音注は、『玉篇要略集』・夢梅本『和玉篇』にも見られる（岡井（1933）・北（1977）参照）。漢音と呉音が整理されず付されるのは、『和玉篇』諸本によく見られる体裁である。

14　『新撰字鏡』に見られる万葉仮名が用いられている『和玉篇』として、前田（1967）が延徳本『倭玉篇』を、山田（1967）が「音訓篇立」を挙げている。しかしなが

ら、「文華館本」に見られる万葉仮名と比較可能な箇所が「延徳本」・「音訓篇立」にはなく、関係は分からなかった。山田（1967）は、「音訓篇立」の異本として賢秀本『音訓篇立』および『音訓鈔』があり、これらが「音訓篇立」とかなり近い本であることを述べている（但し、これらの本における万葉仮名について山田論文に言及はない）。賢秀本については北（1977）が万葉仮名の存在を報告しているが、『音訓鈔』についてははっきりしない。

15　また注文に未審などと書かれている本文もあり、保留されたような形跡も見える。